

戦後日本の住宅デザインの歴史的变化について

1956年から1960年までのデザイン思潮

Historical Change of House Design Postwar Japan Design Thought From 1956 to 1960

小泉 幸男*
Yukio Koizumi

I 序

前稿に於て述べたように機能主義デザインにあき足りない気持が背景になって新たな方向を求める動きが強まり伝統的な手法を取り入れようとする傾向がひろまって来た。この状況について本稿を始めるに当って再度ふれておきたい。

元来機能主義デザインは方法論的に言うと人間生活を抽象化して本質的なものを見出そうとする行き方をとって居り、現実から出発したにもかかわらず理想主義の傾向が強くなったのである。この傾向は工業生産化を目指すために一般解を求めようとした姿勢にも裏付けられていた。そして人間生活を抽象化した結果万国すべての民族に共通な普遍的なものこそ本質的なものであるという考え方になり国際主義の方向へ向って行ったのであった。この方向は戦後の日本に於て伝統的なものは封建的なものであるとしてすべて否定し欧米のものを近代化の典型と見てひたすら希求する風潮にもぴったり合ったのであった。当時の一般解を求める方向や工業化を目指す方向も時代的な正当性があったからこの面からも機能主義デザインはためらうことなく受け入れられたのであった。

しかし機能主義デザインが行きつく所まで行きついて行きづまりとなった時反省が生れた。

人間生活は決して普遍的なものでも抽象的なものでもなく現実の社会に密着した現実的なものであるという認識である。この認識は世界的にひろまり「新経験主義」や「新風土主義」を生んだのであった。我が国に於ても機能主義デザインの理想主義的傾向に対して日本人の現実生活を直視しなければならないという考え方がつよまり現実主義の傾向が高まって来たのである。又国際主義に対しても日本人の生活には民族が長い間かかって作り上げた伝統的な生活様式や生活感情が根強く結びついて居りこれを無視することは出来ずむしろこれを直視する所から出発しなければならないという考え方がつよまり民族主義の傾向が高まって来たのであった。

以上述べた状況の変化は戦後の歴史に於て非常に重要なものであるので少し詳しく述べる必要がある。そこで本稿に於ては少し枠を広げて住居以外の作品にもふれることとし又対象とする期間も一部さかのぼってふれることにした。この点をお許しいただきたい。

II 主な主張とそれに対する筆者の見解

1 社会主義リアリズムについて

機能主義に対してリアリズムの立場から最も激しく対立したものは社会主義リアリズムだっ

たと言える。筆者は前稿に於て社会主義リアリズムについては特にふれていないのであらためてここでふれておきたい。

ソビエト連邦に於ては革命後構成主義デザインが行われた。これは機能主義デザインと同様に理想主義、国際主義の傾向が強かった。しかし間もなく否定される。それは当時のソ連の民衆からあまりにもへだたっていたからであった。そして社会主義リアリズムのデザインが登場することになった。社会主義リアリズムの考え方はスターリンの言葉「プロレタリア文化は民族的な文化を破棄せず、それに内容を与える。それとは逆に、民族的な文化はプロレタリア文化を破棄せず、それに形式を与える。」によく表わされている。そしてモスクワ大学に代表される古典的な形体と伝統的な装飾を多用した建物が次々と建設されて行った。我が国に於ても戦後初期に於ては共産主義を将来の新しい社会を目指すイデオロギーとしてあやまりないものと信じる心情はかなりあって社会主義リアリズムの立場からの機能主義デザインに対する激しい批判があった。しかしソ連流の社会主義リアリズムのデザインは戦後の日本の若い建築家達にとってイデオロギーは理解出来てもデザインそのものは全く共感が得られなかった。例えばモスクワ大学にしてもその設計が内容を重視したものとは思われず、装飾についてもそれがロシアの民衆に深く根付いているのは理解出来ても現代の建築に用いるにはあまりにも前近代的であり進歩性に欠けていると思われたのである。社会主義リアリズムについての見方は丹下健三氏の以下の批判が最もよく要約していると思う。

「ソシアリスト・リアリズムの立場は——現実ではありえないといえるのである。ここでは、建築空間の表現にその重点がおかれ、それと民衆の生活感情との接触するところを問題の起点とするのであるが、そこに考えられている民衆、その生活感情のとらえ方には、現実からの大きなずれがある。とくに民衆の生活感情をある歴史的位置に固着させて考えようとする

傾向は、しばしば、その表現を形式主義においこんでいるのである。」¹⁾

「社会主義リアリズムの陣営では——内容において社会主義的、形式においては民族主義的——というテーゼを打ちたてて、この機能的なものとの表現的なものとの野合を試みたが、これは装飾過多の形式主義におちいってしまったものである。」²⁾

我が国に於ては社会主義リアリズムは育たなかった。それはその立場をとる人達が日本の社会主義リアリズムのデザインを作品によって確立することが出来なかったことも原因している。しかし機能主義デザインにあき足らない当時の建築界をリアリズムに向かわせる役目は果たした。この点については丹下氏の「このような誤りにもかかわらず、ソーシャリスト・リアリズムは、すでに述べた現代建築のリアリズムへの傾向を促す歴史的役割を果たした点を、否定しすることはできないのである。」³⁾ という言葉がよく表している。

2. 伝統に関する丹下健三氏の主張について

この時期のデザイン思潮の中心的な問題となったのは伝統の問題であった。その中で最も重要な主張をしたのが丹下氏であった。丹下氏は前稿でも取り上げたように進歩と伝統の統一を目指して来たのであった。氏によれば進歩と伝統とは対立物でありながら人間生活はこの二つのからみ合いの中から変って行くのであり、デザインも機能主義デザインが主張したように伝統を否定して進歩を求めることは出来ないと考えた。この二つは統一されなければならないと考えたのである。このことは勿論新しいものの中へ伝統的なものを部分的に持ちこむことではない。新たな創造である。この考え方は理論としてはよくわかるが実践は容易ではない。今ここで時期は数年さかのぼるが丹下氏の実践のあとをたどってみたい。戦後の丹下氏の計画の中で最も重要なものは広島市の平和会館の計画である。これは1949年に懸賞競技に当選して実施に移されたもので中央に陳列館、向って右に本館、左

に公会堂を配し、陳列館のピロティを通して原爆ドームを望むという計画が実現したのであった。丹下氏によればこの計画に当って中心になる陳列館のイメージになったのは正倉院の校倉だったという。しかし実施設計の段階になって焼跡から立ち上る力強いものを表現するためには校倉では物足りないと思うようになり伊勢をイメージするようになった。丹下氏は伊勢の造形の中に統一国家を形成しつつあった勢力の力強さを表わすものがあると見たのであった。このようにして陳列館の造形は生れたのであった。しかしそこにはコルビュジェやニーマイヤーの影響も見られ丹下氏の意図は十分成熟しているとは言えず独自の造形にはなり切っていない。陳列館完成後次の本館が実施されるまでに時間があつた。この間に丹下氏の伝統に対する思いは更に強くなって行つたと思われる。そしてその思いが本館で一気に結実する。ここで丹下氏

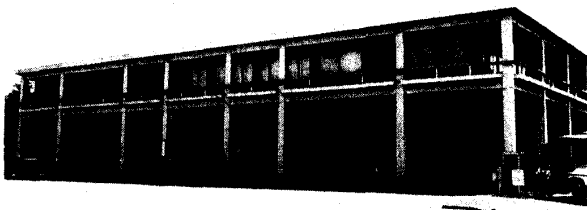


写真1 広島平和会館本館

がイメージしたのは寝殿造りであつたと思われる。壁をすべて耐震壁に集約して内部に取り込むことによって柱を極度に細く解放的な空間を実現して見せたのであつた。それは正に寝殿造りのイメージであり王朝風の“みやび”を現代に実現したものであつた。この作品は近代と伝統を統一するという丹下氏のこの時点での結論的な解答であり、従来のものにはないRCの新鮮な造形は見るものの心をうって当時のデザインに大きな影響を与えたのであつた。

しかしそれが反省されることになる。そのきっかけになつたのが国会図書館の懸賞設計をめぐる動きだったのである。国会図書館の懸賞は戦後最大の懸賞として建築界の関心を集めたのであつたが、その応募規定は実施設計に入選者を関与させないばかりか設計変更の場合にも入選

者の意見を聞かず、またこれに対して入選者の異議の申し立てもできないという建築家の人権を全く無視したものであつたのである。戦後各方面で民主化が進み人権が重視されて来た中で建築家の権利ははかばかしく認められなかつた。その焦りと不満がここで一気に吹き出したのであつた。戦後の建築界の政治的な運動は新日本建築家集団の崩壊後鳴りをひそめていたのであるがここで再び燃え上がった。しかも今回は建築家にとって身近な問題であつただけにはるかに地についた運動になつた。「建築著作権確立準備委員会」が結成され丹下氏はその指導者になつたのである。この運動の推移については本稿の主題ではないので省略するが、国会図書館の問題は一定の成果をあげて終結し丹下氏も懸賞競技に参加することになつたのである。しかしこの運動が建築家達に与えた影響は大きかつた。自分達も民衆の1人であるという自覚が生れ民衆との連帯感が育つていったのである。この展開については後にもう一度ふれることにするが丹下氏にもこの思いは強かつたのである。

民衆のたくましさを表現するとすれば広島島の造形ではあまりにも弱い。ここで丹下氏は日本建築の伝統をもう一度全面的に見直すことになつた。その成果が1956年6月の新建築に発表された「現代建築の創造と日本建築の伝統」という論文になつたのである。

この中で丹下氏は寝殿造りについて次のように言っている。「この平安の貴族社会に定形化された寝殿造りと呼ばれる住居建築は、伊勢において見られた技術から一步も発展することなく、ただその創造の姿勢とその表現において、風雅なみやびの性格を帯びて、繊細になり、技巧的になつたものにすぎない。技術の停滞はつねに技巧的なものへの関心をうながすものである。」¹⁾ “みやび”は貴族社会の停滞の表現であるとして否定的な見方をしている。又伝統的な自然観についても次のように述べている。「それは、人間の労働において克服してゆく対象としての自然、そのような自然にたいする人間の主体的認識からくるものではなく、自然にたい

する消極的な観照からきているものである。」⁵⁾

丹下氏はこのような自然観が“もののあわれ”であるという。やがて新興勢力として武士が登場するが武士階級もやがて当初の健康さを失い現実から超越して自己の内部に閉じ込められるようになる。それが“すき”の世界であるという。やがてこの傾向はさらに深化して行き世阿弥の能や利久の茶にみられるような自己を無にする境地に至る。これが“さび”であるという。一方農家はどうか。農家には健康で簡素な野性的な素朴さが見られるがその中には貧しさを肯定しそれを感性的に受けとめて美化する“わび”の性格が含まれているという。これらの傾向がやがて桂離宮によって代表される“数寄屋”に集約される。そしてやがて江戸の庶民の現実があるがままに肯定する消極的な“風流”の姿勢になって行く。丹下氏によれば日本の歴史の中にも変革の時期はあったがその変革をになった人達の積極的な姿勢も大きな流れにはならずやがて消極的な姿勢に回帰してしまったという。この見方は筆者も全く同感である。我が国に於ては変革期に於て変革をになう階級が十分に成長せず常に変革が不徹底になってしまった。そのために積極的なものが伝統となり得ず常に現状に対して肯定的で消極的なものが伝統になってしまったのである。丹下氏によればこのような消極的な姿勢は明治以後現代に至るまでの我が国の建築界に流れて居り、現代のジャポニカスタイルを支えているものはこの消極的な姿勢に他ならないという。丹下氏は現代建築に日本の伝統を創造的に生かすためにはこのような伝統の性格を自覚しこれを克服しなければならないと主張したのである。以上のように丹下氏はジャポニカの流行に対してその背景になっている日本建築の伝統の本質にふみ込んでこれを真向から批判したのであるが、これは伝統的手法を安易にとり入れる傾向に対する厳しい警告であり筆者も全く同感するものである。さて問題は実践の方法であるが丹下氏は日本の伝統の中で積極的に生かし得るものとして典型化の方法を挙げている。同氏によれば典型とは現実生活

の発展性・多様性に対応できる型であり、それを求めるためには一つ一つの機能に対してその内部にわけいりその中から発展的な本質、客観的な法則をつかみとる必要があるという。そして空間の融通性、規格化された互換性、無限定性がその結果得られた成果であるという。丹下氏はその実例として農家の田の字型プランや町家の通り庭を挙げてこれらは日本の庶民が長い間の生活の智慧によって作り挙げた典型に他ならないという。そして最後に次のように述べている。「現代における典型化への途は——日本の伝統的姿勢を否定し、技術の停滞に甘んじることなく、技術をさらに大胆におしすすめるような姿勢に立ってはじめて可能であり、また伝統のなかにあった典型化の方法は、現実を克服するための積極的な方法として、さらに発展させてゆくことができるのである。」⁶⁾



写真2 香川県庁舎

この丹下氏の成果は、1959年1月の新建築に発表された香川県庁舎に結晶している。ここでは東京都庁舎で用いていたコアシステムを更に徹底して空間の無限定化を実現すると共にRCの架構を表に出して民衆の建築にふさわしいたくましい表現に成功している。それは広島のとくしや記念館本館のたぐいまれな美しさの一方であまりにもかぼそい弱々しい姿とは対照的でこの間に於ける丹下氏の発展がよく理解出来るので

ある。

3. 白井晟一氏の主張について

この時期にもう一人極めて注目される存在となったのが白井晟一氏であった。白井氏はそれまであまり建築ジャーナリズムには登場して来なかったのであったが1955年4月の新建築に「原爆堂」というユニークな計画案を発表して脚光を浴びた。この計画についてはここでは省略するが実は白井氏はその前に1953年11月の新建築に「住宅思言」という一文をのせている。これは短い文章であるが白井氏の考え方がよくわかって重要なものである。この中で同氏は匙と箸を比較している。匙は幼児でも使えるようにやさしいのに対して箸はむづかしい。使いこなせるようになるまでには長い訓練が要る。しかしそれを経て使いこなせるようになれば大きな機能を持つようになる。白井氏は箸が匙に比べて機能的におとっていると性急に断ずるのはあやまりであると言っている。白井氏は単純に機能を満足する形を求めようとする機能主義の方法を真っ向から批判したのである。同氏は結論的に次のように述べている。「建築上の機能は住む人間の試練を求め始めて高度の機能を表わす——生理に甘えさせること丈が機能的で合理的であるとは考えない。むしろ人体を正し、教え鍛える建築にこそ従事したいと思う。限られた瞬間に特定の人間のみにも媚びる様に造った建築に永遠の形など現われることはない。」⁷⁾ 筆者は白井氏のこの考え方に必ずしも賛成ではない。むしろ必要な機能に平易にこたえ誰でもやさしく使いこなせる形を与える機能主義の考え方に時代的な正当性があったと思う。しかし同時に白井氏の言葉は当時のあまりに安易な機能主義デザインに対する警鐘としては聞くべきものがあった。

さらに白井氏は伝統の問題に関して1956年8月の新建築に「縄文的なるもの」という重要な論文を発表したのである。これは新建築誌が伊豆の韮山に江戸時代の代官屋敷として現存している江川邸を紹介した際に発表したものである。

この中で同氏は先ず伝統の取り上げ方に問題があるとして次のように述べている。「価値概念として固定化し、その上情緒や繊細や簡素という感覚的皮相の墨流しを器用に移しとっては、これを日本的なものとしてノミナライズしてきたことはなかったか。」⁸⁾ 白井氏は長い間日本の文化の歴史を縄文と弥生の葛藤として把えようとして来たという。同氏は日本の伝統の主流となった現状に無抵抗で受動的なものを弥生的としたのである。日本建築の伝統の見本とされてきた貴族の邸宅や民家は正にそれであるという。しかし同氏は日本の伝統の中には一方でこれと全く異質な荒々しいエネルギーを感じさせるものもあるとしてこれを縄文的としたのである。同氏は江川邸の巨大な茅葺屋根やこれを支える荒々しい架構には正に縄文的なポテンシャルを感じさせるものがあるという。白井氏はさらに日本の歴史の中で空海や時宗あるいは雪舟や利久の中に縄文的なものを感じると言っている。そして論文の結論として同氏は次のように述べている。「われわれ創るものにとって、伝統を創造のモメントとするということは結終した現象としての Type あるいは Model から表徴の被を截り取って、その断面からそれぞれの歴史や人間の内包するアプリオリとしてのポテンシャルをわれわれの現実において感得し、同時にその中に創造の主体となる自己を投入することだといわねばなるまい。」⁹⁾ 「消長こそあれ、民族の文化精神をつらぬいてきた無音な縄文のポテンシャルをいかに継承してゆけるかということのうちに、これからの日本的創造のだ

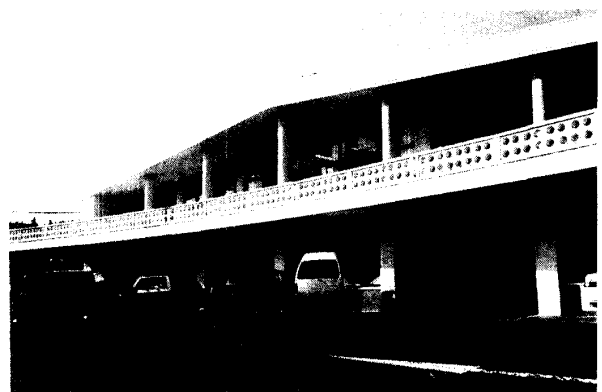


写真3 松井田町役場

いじな契機がひそんでいるのではないかとおもう。」⁹⁾ 白井氏の主張はジャポニカの源泉とった日本の伝統を弥生的なものとしてしりぞけ、伝統の中にある異質な縄文的なもの特にその精神的なものを強調した点で当時の底の浅いジャポニカブームに冷水を浴びせることになった。そして白井氏はその実践的成果として1956年7月の新建築に松井田町役場を発表した。この作品については詳しい説明は省略するが、ジャポニカデザインとは全く異質なもので当時の建築界に大きな衝撃を与えたのであった。

4 民衆の問題について

建築創造の基盤を民衆におくということについては誰も疑いをはさむ余地はなかった。しかしその方法論となると簡単ではない。民衆が何を望んでいるのかそれをいかにして知るかである。従来から大学の計画系の研究室や官公庁で行われていたのは調査にもとづく方法であった。しかしこれに対しては建築家の側からは否定的な見方が多かった。その代表的な意見として丹下健三氏は前出の「現代建築の創造と日本建築の伝統」の中で次のように述べている。「他の建築家たちは、将来にたいする希望をもつことができず、この現実の社会のあるがままの肯定から出発している。そこでは、現象の統計的・平均値的な評価、調査主義が彼等の現実認識を支えている。彼等にとって、この現実には宿命的なものなのである。そこでは、この現実の生活のなかにある伝統的な生活様式、あるいは伝統的な好みというものもそれがただ多数のもつものであるという点で、それを無批判に肯定してしまう。」¹⁰⁾ 「このような傾向は日本の官僚主義とアカデミズムのなかに強く現れており、公営住宅の建設や建築研究者層の調査主義のなかに反映されている。」¹¹⁾ かなり激しい批判であるが筆者もその趣旨に全く同感である。調査によって民衆の真の希求を知ることは不可能である。何故なら民衆は問題の前進的な解決についての知識を持たないからである。それはあくまで建築家が提示しなければならない。その上で

民衆の真の希求を引き出さなければならない。それをせずに現状の反映にすぎない調査の結果をそのままデザインに直結させるとすればそれは単なる現状の改良にすぎず真に前進的な創造とはなり得ない。とは言ってもいかにして民衆を把握するのかそれはあまりにもむづかしい問題である。これに関して1956年10月に建築文化誌が「建築家として民衆をどう把握するか？」というテーマで特集を組み、池辺陽、丹下健三、西山卯三の三氏が発言しているのが注目される。この中で池辺氏は民衆に対して建築を対立物として提示しその対立のなかから総合の道を見出すことを主張している。又丹下氏は先ず建築家側に構想がなければならないとし、建築家の創造的な構想力によってはじめて民衆の求めているものを発掘することができるかと主張している。この両氏の主張は両氏の建築家としての立場からすれば当然の主張であるとも言え又逆に新味も感じられずこのテーマのむづかしさを際立たせることになった。一方西山氏は建築家が民衆との正しい結びつきを得るためには民衆の生活改善の闘いと結びついた創作活動が必要でありそのためには先ず建築家自身の組織が必要であるとして次のように述べている。「すべての建築家層が、職場でその仕事を通じて、また生活の中で、民衆との交渉を意識的にとりくみ、これを建築家層全体の活動にくみ入れてゆく組織が、そうした活動のうらづけとなろう。」¹²⁾ この考え方も西山氏としては特に新味はない。何れにしても民衆をいかに把握するかという問題への答えはここに登場した三氏の世代ではなくもっと若い世代にまたねばならないとう感が強かったのである。

5. 建築界の革新運動について

国会図書館の懸賞設計に端を発した運動は丹下氏達より一世代下の若い建築家によって大きな革新運動となって行った。それは戦後の建築界がはばなく発展し次々と新しい作品が発表されて行くのであったが、その裏で設計体制という点からみると有名建築家である所長の田熊

依然としたワンマンコントロールで進められ若い所員達が創意を生かす道は閉ざされたままであったからである。又これらの人達にとっては生活も楽ではなく生活を改善したいという欲求もあった。若い人達の間にはかなり前から不満がうっ積していたのである。当然の結果として革新運動が高まって行った。ワンマンコントロールに対する批判は指導者の一人大高正人氏の「ワンマン・コントロールという民間のアーキテクト・オフィスの設計の方法は、ある一人の人の感覚というもので支配し、非常に客観性を欠くと私は認定するわけです。」¹³⁾という言葉がよく表わしている。この人達にとっては設計体制そのものの変革が第一の目的だったのである。大高氏等は前川事務所の若手所員を中心にして「ミド同人」という組織を作ったのであった。その理念はワンマンコントロールを排して皆が対等の発言権を持ち討論を重ねながら設計をまとめて行く共同設計の考え方であった。そして同じような考え方の組織をきゅう合して「五期会」が結成された。この会の理念は宣言の中の次の言葉「われわれは設計活動という現実の労働を同じ基盤としてここに結集した。この集まりに拠ってわれわれは、職場の生活、ならびに設計活動の機構と設計者としての意識における共通の問題をたしかめつつ、設計体制の変革を通じてわれわれの創造力を真に解放し、ひろく他の諸分野の組織と手を結んで、民衆のための建築創造のなかで、われわれの果たすべき活動の場をつくりだすべく闘うものである。」¹⁴⁾ この運動は前述した通り起るべくして起ったと言える。今から思えば共同設計というもののむづかしさもあってこの運動の先行きには不安なところもあったのであるが、理想に燃える若い人達の胸にはそのような思いも入り込む余地はなかったのであろう。

6. 福島教育会館について

このように若い建築家達のはなばなしく旗あげたのであったが実践となると容易ではなかった。その時ミド同人が絶好のチャンスをつかん



写真4 福島教育会館

だのである。福島教育会館の実施である。これは福島県の教員組合が自らの資金で自らの会館を建てようとするもので出来上れば地方の民主運動のとりでともなり地方の民衆文化をうちたてる拠点ともなるものであった。組合員達は熱意に燃えていた。メンバーの一人鬼頭梓氏は次のように述べている。「日本の中でも貧しい地方に属する福島の教組の人たちが、かつての焼跡に、今度は燃えないもので、皆のために、自分たちのために、建てたいというその意欲は、ほんとに凄じいものがありました。」¹⁵⁾「そこを根城にして、たくましい地方文化を築き上げるのだという烈しい生活の意欲でありました。」¹⁶⁾ ミド同人としてもこの建物の実施に自らの革新運動の命運をかけて取り組んだのであった。このようにして建物は組合との連帯の中から生れた。又同時に建設労働者との連帯も生れたのであった。このことは非常に重要な意味もっている。今ここでミド同人の人達がどう考えていたのかしらべてみよう。鬼頭梓、木村俊彦両氏は次のように述べている。「工業が未だ手に依存していた時代には“物”を使う手とそれを創る手とは、同一であるか或いは同一の地域社会に属しているのが普通であった」「このように、かつてなまなそして具体的な要求によって密接に連っていた技術と人間とはその進歩の過程において、即ち技術が手から機械へと移るにつれて、いつか知らず知らずの中に離れて行ってしまったのであろうか。——一方に於ては技術が、人間を現実の人間から抽象的な人間一般へとおきかえてしまったかに見えるのと同時に、他方、社会もまた技術をその地域やそこに住み

働く人達の生活とは無縁な、抽象的な無国籍なものとして把握しているように思えるのである。」「私たちは今、この現代の高度の技術を、再び人間の生活へかえす必要の切迫をおもう。」「私たちが、福島教育会館という一つのオーディトリウムの設計を通して、意図し或いは模索してきたことの一つは、即ちこの困難な課題に対して、何らかの解決の糸口を見出そうとする試みであった。」¹⁷⁾ この人達がこの建物の実施を通して何を旨としたかは以上の言葉でよくわかる。そしてそれを労働者との連帯の中から生み出そうとしたのであった。当時の日本の中でも後進地域であった福島県では建設工事は多くの部分が手作業で行われるという今日では想像もつかないような状況であった。砂利は阿武隈川で手で採取され川岸の現場まで肩に背負って運ばれたのであった。現場で働くのは地元の職人であり地元の農家の主婦であった。設計はこのような状況をあらかじめ十分ふまえて行われた。鬼頭氏は次のように述べている。「つくる手についても一方で今ある機械や現場での可能な精度、職人の労働への考慮等、今の手にできるだけ応えるための努力を積むと同時に、他方、今ある手により多くを求め、その潜在する能力の発揮を期待しました。」「一方にこのような課題を控えながら、同時に、困難なシェルやシャイベを選び、安い型枠でのコンクリート打放しを選んだことは、そのまま私たちのつくる手への認識と期待との表明に他なりません。」¹⁸⁾

このようにして完成したこの建物の造形は福島という風土そのものの素朴で逞しいものとなった。新しい設計体制を打ち立てること、民衆との連帯によって民衆のための建築を創造すること、若い建築家達の間からもり上った革新運動の目標はこの建物によって見事に結実した。その意味で画期的な業績とすることができる。

Ⅲ まとめ

機能主義への反動として現実主義、民族主義が生れたことは前述した通りである。桂に代表

される我が国の伝統的な建築の美しさは理屈を抜きにして心をひくものがあり、機能主義デザインに物足りなくなった心をそこに回帰させたのは極めて自然であった。海外で高い評価を得たこともあってジャポニカブームが起った。しかし建築界に革新運動が再び高まって来て建築家の間に民衆意識が根付いて行くに従って伝統に対する疑惑と反省が生れた。民衆の造形とするにはそれはあまりにも弱いものではないか。筆者も前述した通り我が国の歴史に於ても変革は何回も行われている。その時変革をになった人達によって新しい時代にふさわしい逞しい造形が生み出された。しかし変革はつねに不徹底に終りこれらの人達による逞しい造形も間もなくしぼんでしまう。そして長い歴史を通じて現実を受容する消極的なものが伝統になってしまった。民衆意識に目ざめた建築家達にとって伝統は克服しなければならないものになったのである。しかし実践の道は容易ではない。丹下健三氏は伝統の中にあつた典型化の手法を唱え白井晟一氏は縄文的なポテンシャルを主張した。しかし根本的な解答はもっと若い層から生れるべきであった。この時期の革新運動は戦後間もなくの政治的な運動と違って若い人達にとっては身近なものであつただけに根深いものになった。そしてその中から五期会が生れ福島教育会館が生れたのであつた。これは戦後の大きな転機であつた。今から当時をふり返ってみて強く感じるのは若い建築家達の社会的な意識であり新しい時代を生み出そうとする熱意であつた。実践のむづかしさもあつて先行きには不安がなくもなかったが彼等はそれも意に介せずひたすら前進して行つたのであつた。

引用文献

- 1) ①丹下健三 ②新建築 ③Vol.30
1955年1月 ④15p
- 2) ①②同上 ③Vol. 31 1965年 6月 ④29p
- 3) ①②③同上 ④35p
- 4) ①②③同上 ④32p
- 5) ①②③④同上

- 6) ①②③同上 ④37p
- 7) ①白井晟一 ②新建築 ③Vol. 28 1953年11月
④62p
- 8) ①②同上 ③Vol. 31 1956年 8月 ④4p
- 9) ①②③④同上
- 10) ①丹下健三 ②新建築 ③Vol. 31 1956年 6月
④35p
- 11) ①②③同上 ④36p
- 12) ①西山卯三 ②建築文化 ③1956年10月 ④28p

- 13) ①大高正人 ②新建築 ③Vol. 31 1956年 3月
④74p
- 14) ①五期会 ②同上 ③Vol. 31 1956年 7月 ④
しんけんちく・にゅーす
- 15) ①鬼頭梓 ②同上 ③Vol. 31 1956年10月 ④
37p
- 16) ①②③同上 ④38p
- 17) ①鬼頭梓 木村俊彦 ②同上 ③Vol. 31 1956
年2月 ④23p
- 18) ①鬼頭梓 ②同上 ③Vol. 31 1956年10月 ④
38p

参考文献

- 1) ①岩田知夫 ②丹下健三の日本的性格 新建築
③Vol. 30 1955年 1月
- 2) ①川添登 ②現代建築を創るもの 彰国社 ③
1958年11月